

芥川だより

発行日 * 2025年8月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集

川口 伸

発行 人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

今回の参議院選挙結果が訴えるもの



自公政権の過半数割れ、新興政党の参政党躍進など新しい政治の流れが起きた中で私が感じた事は、既存政党の政治家は大衆の気持ちを理解していない。いや理解しようとしな、自分たちの考えを押し付けてくるだけだ。これに対して大衆の一部は不満を投票という行動で示したのだ。

演説する政治家は、自分の言っている事を国民の多くは理解していると考えているのだろうか。はっきり言って、演説している政治家も聞いている多くの国民も理解していない。聞かされている国民もうんざりしながら聞かされているといったほ

うが正しい。国民との対話には程遠い、一方的な押し付け演説になっている。政党政治の限界ともいえる政党本部が指示するレジメの繰り返し演説になっている。

日本もいよいよ格差社会が拡大し、国民の利害対立は避けられない。労働組合も大企業労組が主流で大企業の利益を減らすような提案は出来ない。かたや多くの国民が働く中小企業では、大企業の下請け構造から抜け出しにくい厳しい現実がある。だから、大企業が怒ると思える政策を提案は出来ない。このようにがんじがらめの構造の中で人々は生きている。肝心の利益配分や雇用条件の改善については、議論しにくい状況が戦後続いてきた。

我々は、人々は皆、平等で自由だと教えられてきたが、事実とは異なる。生まれた環境によって全く違う人生を歩まなければならない。多くの人は生活に追われ十分な教育環境に恵まれず、情報社会の恩恵を受けられずにいる。政治家や学識経験者などが話す話をまともに理解しているのは国民の1割にも満たないだろう。多くの人は理解できないのだ。なぜかと言えば、政治家たちがわかりやすく丁寧に詳しく話そうとしないからだ。

こんな世の流れに対して反旗を掲げた国民が一部いたから今回の選挙結果になったが、本格的な変化はこれからだ。選挙に無関心だった多くの国民が反体制に流れる。その指導的な政治家は、国民に対して丁寧に詳しく皆が理解できるようなやさしい言葉やパフォーマンスでもって対話するような演説が出来る政治家だ。

死をめぐるあれやこれ(128)

友人の訃報

石川 吾郎

先日学生時代の友人の訃報が届いた。青春の時代をともに過ごした場面のあれこれが、頭を駆けめぐって感慨にふけた。そしてこのような知らせが当たり前の顔をしてやってくる年代に自分がなっているのだ、という事実が改めて切実に感じられてくる。

◆私は常々「歳をとる」ということは、自然に頭に思い浮かんでくる人の中で、亡くなった人の割合が増えてくることではないか、という実感をもってきた。何気なく頭に思い浮かぶ人の、あの人もこの人も、もうこの世にいない人ばかりになってくる……。◆子供のころの食卓で、祖父母や両親など大人たちが、頻りに「どこそこの誰々さんが死ななかつたげな」「げな」「は伝聞の岐阜弁」とぼそぼそと話していたのを思い出す。子供の私は、そんなことには一向に興味なく、なんで大人は人が死んだ話しばかりするんだろうと、つまらない思いでそそくさと夕食を済ませて、テレビの自然番組を見に行ったものだった。◆ところが今では妻とそんな話題を話すことになっている自分を発見して、ハッとした。しかしこれは存在と非在を区別する最も重要な情報交換なのだということを自覚している。◆亡くなった友と頭の中で会話をする。「そのうち、そちらでまた会おう。だがまだしばらくは迎えに来ないでほしい。自分にはもう少しだけやりたいことがあるんで。そのうち行くので、その時に合うのを楽しみにしているよ」と。

芥川だより二三号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム128	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 137	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 86	祖蔵哲	3
大峰奥駆道 93	下村嘉明	4
ボケ老人の雑話 16	明石幸次郎	4
オクラの山たより 107	因了生	5
隠された歴史 82	満田正賢	9
俳句	影山武司	12
編集後記	SK生	12
ふみの道草 86	山椒魚	13

素老人☆よもだ帳 (137)

坂本一光

◆自由律短詩

初めて読んだときから強い印象を残した句がある。自由律俳句の代表句なのだろうと思う次の二句である。

まっすぐな道でさみしい

種田山頭火

咳をしても一人

尾崎 放哉

句が詠まれた背景や句の意味については専門の解説本を見てほしい。山頭火の句については、この句に出会った後、あるテレビドラマを何気なく観ていてハッとすることがあった。ドラマの題名も内容も全く覚えていない。覚えていたのは、電車の中で友達に語った俳優・安田成美の叫びにも似た言葉だけである。曰く、「心がまっすぐじゃないから、さびしいの」。それだけである。しかし、そのセリフは、私の中で瞬間的に山頭火のあの句に結び付いた。「ああ、そういうことだったか」と妙に腑に落ちたものである。真まっすぐな道に立つた時に、「おまえの心は真まっすぐか」と自問することが習慣になった。

俳句であれ、川柳であれ、短歌であっても、心をかたちにするときに五七五や五七五七七に収まらないことはいくらかもあるだろう。収める努力は大切だろう。かたちに収まらなくて、あるいは単純に季語の有無などで、俳句ですか、川柳ですか、いやいや短歌ですかと言われて、「心です」と答えることがあっていいのかもしれない。そんなことを思ったのは、「にんげんだもの」の言葉で著名な相田みつをの「短詩」を読んだときであった。彼の言葉には、定型の美しさとは異なる、心を打つ自由律の力があると感じた。今さらの引用です（改行は筆書に従った）。

つまづいたって

いいじゃないかにんげんだもの

うばい合えば足らぬわけ合えばあまるうばい合えば憎しみわけ合えば安らぎ

この世はわたしがわたしになる

あなたがあなになるところ

子どもへ一首

どのような道を

どのように歩くとも

いのちいっぱい生きれば

いいぞ

一番わかってる

ようで一からぬこの自分

あとじゃ

できねんだよ

なあ

いまのことは

いましかできぬ生きて

いるうち

はたらけるうち

うれい

なみだ

あらわれるたびにまなこがふかくなり

うそは

いわない

きめて

うそをいう

かんがえて

ばかりいる

と目がく

れちやう

よ

こんな川柳がある。

人間になろう

日が暮れ

陽が昇る

内藤凡柳

野を越え
山を越え
谷口青之介

人間になるのも、凡人になるのも、素老人には誠に難儀な夏である。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲爺爺い」の時事放談(86)

祖蔵 哲

排外主義と排除の思想

今年は七月初めから異常な暑さがずっと続いている。夏日、真夏日、猛暑日と気温が上昇する度に用語が増えていく。最高気温がそれぞれ25度、30度、35度以上の日を指すのだが、この先40度以上が続く日が増えればどう呼ぶのであろうか。さて、先月のニュースといえぱトランプ関税やイスラエル、ウクライナ問題は膠着状態にあり希望と絶望が交互に起きている。しかし、出口はまだまだ見えない不透明な世界に変化はない。

そこで、ニュースは7月20日に行われた日本の参議院議員選挙の話題で占めつくされた。混乱は今も国会等で続いている。

さて、この度の選挙の特徴は何といつても参政党というポピュリズムを掲げる党が大躍進したことだ。参政党は改選前一議席から十四議席を獲得した。驚くことに全国比例区での獲得数は参政党が自民党、国民民主党に次いで全体三位の得票数だった。野党第一党の立憲民主党は、比例獲得四位にとどまっており、与党から流れた票が参政党と国民民主党に集中したと見られる。

ポピュリズムは、カリスマ性を持つ指導者が、既存の政治システムを批判し、複雑な問題を単純化し、感情に訴えかけるメッセージを発信することによって大衆を煽動し支持を得ようとする政治スタイルだ。

(1) 日本人ファースト

参政党は2020年に結党された新興政党で今回の参院選では「日本人ファースト」をスローガンに掲げ、外国人労働者の受け入れ是正や外国人の土地購入の制限など主張した。この「ファースト」という言い回しは2017年第一次トランプ政権が掲げた「アメリカ第一主義」から耳にするようになったが、日本ではこれに同調するかのように東京都知事選挙では「都民ファースト」が使われた。

「ファースト」はとは順位のことである。第一があれば次は第二になる。誰が次に回されるのか。第一を「日本人」と限定するとその他の人々は当然、後回し「排除」されたことになる。ファースト思想はこの「排除の思想」である。

(2) 排外主義

この排除思想は排外主義として歴史は古い。古代文明では、自文化を「文明」とみなし異民族を「野蛮」と見下すエスノセントリズムが排外的態度として現れていた。古代ギリシャのバルバロイや古代中国の夷狄などはその始まりであろう。西欧が中世になるとキリスト教を中心とした宗教が排除主義をとるようになり宗教戦争が勃発する。さらに次の時代、ヨーロッパの海外進出と植民地主義の中にも排外主義的思想が内包されていた。彼らは出会った先住民を「未開の野蛮人」とみなすことで植民地支配を正当化する。近代になるとこの排除の対象は科学的なるものを装った「人種」として固定的に選別されるようになる。さらに民族という作られた概念によってその優等順位は複雑化する。ここで生まれるのがナショナリズムである。

西欧諸国による植民地政策によって搾取され続けた「セコンド」の被支配層の人々は「自分の国」というアイデンティティをもって抵抗する。これが民族自決を促し独立運動となる。これはナシヨナ

リズム「国家主義」の始まりである。しかし、何をもって同一性を確保するかとなるとさらに様々な対立を生む。宗教、人種、民族そして思想など多種多様な分類がその「ファースト」を新たに争うことになる。これが盲目的な「パトリオティズム」・愛国主義になるとその排除は理性を超えて「感情的」「生来的」なものに変化していく。

(4) 排外主義その要因

近代歴史における最大の排外主義は「ナチズム」であろう。その方法は先に述べたポピュリズムの定義に合致する。すなわちヒトラーというカリスマ性をもった指導者が、「ワイマル体制」という既存の脆弱な政治体制を否定し、複雑な状況を「ユダヤ人悪」という単純な原因にすり替え、感情的に煽動したということだ。そのような状況が生まれた原因が経済的苦境である。第一次大戦の敗戦国である当時のドイツは高額の賠償金に悩まされそして同時に世界恐慌が起こる。失業者が溢れる中、ナチ党が「ユダヤ人資本家が不況を招いた」と宣伝してユダヤ人憎悪を煽り、支持を拡大したのである。

このように排外主義の一つの要因が経済的困窮である。現代でも2008年の世界金融危機後に各国で移民排斥を訴えるポピュリズム政党が伸長するなど、不況と排外主義の関連は指摘されている。

統計的にも、失業率が上がる地域ほど外国人嫌悪感情が強まる傾向を示している。さらに二つめの要因が移民問題である。短期間に多数の外来者が流入すると、文化の違いや社会コストへの不安から住民の拒否反応が強まる。人々はしばしば、移民・難民を競争相手や治安リスクと捉え、自分たち仕事が奪われると考え、それが偏見やヘイトスピーチに発展する。それが政治的には入国規制や送還措置など排外的政策につながる。現在のヨーロッパ、アメリカなどの排外主義はすべてこの要素を含んでいる。日本も少し遅れてこの問題が発生している。

三番目の要因がこのような移民が大量に生み出す戦争や内紛、テロなどの安全保障上の緊張状態である。幸い日本では現在、直接戦争状態にあるわけではないので外面的にはさほど深刻でないが、欧米ではこれが最大の要因だ。外国との戦争状態や大規模テロ発生後は、敵性民族・宗教への疑心暗鬼と報復感情から排外主義が急速に燃え上がる。

(5) リスク社会

歴史的に見て「排外主義」は「危機に対する社会の防衛反応」として繰り返し現れる傾向にある。経済・社会に余裕がある安定期には表面化しにくいものの、ひとたび危機や混乱が訪れると、潜在していた他集団への不信や偏見が噴出する。その意味ではつい最近世界を襲った「コ

ロナパンデミック」もその一つである。この中でも極端な外国人排斥運動が起こった。「不安」というものはその原因が分からないから起こるものである。人間というものは目に見えない「不安」というものに対して目に見えるものを対置してそれを排除しようとする傾向を持つ。論理的、理性的に思考するのではなく、「目に見えるもの」すなわち「感覚的」「感情的」なものに惑わされやすい人間の脆弱性を示している。しかし、よく考えてみるとこのような「不安の原因」を作っているのは人間自身である。

近現代の危機の原因が「リスク社会」であると予見し、そう定義したのが、ドイツの社会学者U・ベックである。彼は近代科学の発展は人間に幸せをもたらしたがまた同時に危険度、「リスク」も併せて増加させたと指摘する。その原因が「科学的合理性」と「社会的合理性」の相互矛盾である。「原子力発電」を例にとれば、科学的合理性では原発が事故を起こす可能性は極めて低い確率であり「想定外」になるが、社会的合理性では確率の低い高いではなく一度でも事故を起こしたら甚大な影響を社会や環境に与える。二つの合理性は互いに反発しあうのである。「移民問題」も「科学的合理性」つまり「経済的合理性」だけで考えているとそれは「社会的合理性」と対立する。このように高度に科学的合理化された現在の経済システムはすべての危険発生の根源

となっておりそのリスクは予測はできない。それが「不安」となり、生き残りのための非合理的な「順位闘争」が起きる。これが「ファースト思想」の原因だ。

これに対して、私たちは全人類が知恵を出し合いすべてが生き残る「社会的合理性」の世界を作らなければならない。多様性が全ての生命存在の本来の在り方である。単一存在は脆弱である。これは宇宙の歴史が証明している。

も洗濯されずよれよれだと、もうこれは最悪だ。何を言っても無駄な人間だと判断し、この現場は、私が頑張ろうとなる。休憩も削り、昼休みも短くする。たまには立ち食いになることもある。しかし、終わりごろになれば、相手との意外な無言のコミュニケーションを感じることがある。しかし、ちよい足らずの人だと、こちらの誠意が相手に伝わることはない。

大峯奥駈道(93)

下村 嘉明

体験型人間学 43

ボケ老人の雑記(その16)

明石 幸次郎

3500万を競艇で使ったという彼は、後悔する様子もなく楽しそうに話をする。ギャンブル好きな人は意外と多い。作業現場の休憩室での話題も、競艇場の具体的な話で盛り上がることがある。実際に行つて舟券を買ったことがなければわからない話だから私には未知の世界だ。初めての現場で、これまで一度も仕事をすることがない人と組む時には、かれの服装、挨拶のしかたでおよその判断をする。挨拶もなければ、声も小さい、服をあげて、反対に「良き友」は三つある

1. 高くやんごとなき人
2. 若き人
3. 病なき身強き人
4. 酒を好む人
5. たけく勇める兵(つわもの)
6. 虚言する人
7. よく深き人

として

1. ものくるる友
2. 医師、薬師（くずし）
3. 知恵ある友

をあげていますが、リアリストの兼好法師の鋭い人間観察から出たこの言葉は現代でも通じるところが多いにあります。

しかし、私のような既にボケかけている後期高齢者にとって、今更、良き友になることも良き友を作ることとは中々、難しいものですが、良き友としては、話をするより話を聞けて、そして、気楽に「雑談が出来る友」を追加したいと思います。特に孤独、孤立化してしまいがちな高齢者にとって愚痴話を聞いてくれて、何気ない雑談が出来る友は有難い存在です。

そして、私は、兼好法師の言う良き友の1から3までは残念ながら当てはまらないが、せめて、私が追加した「酒を飲みながら我の話をするより他者の話が聞けて、気楽に雑談が出来る人」にはなれるかなあと思う次第です。

人の話を聞くことは、己の寛容性と忍耐力、人への共感力を試されることになり、兼好法師の仏への修行の道にも通じるものがあるのではと10年間、いのちの電話」の相談員をやった経験として勝手に解釈をしています。

オクラの山たより（107）

困了生

一

作家司馬遼太郎が明治という時代を次のように述べています。

維新によって日本人はじめて近代的な「国家」というものをもった。……たれもが、「国民」になった。不馴れながら「国民」になった日本人たちは、日本史上最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した。このいたいたしいばかりの昂揚がわからなければ、この段階の歴史はわからない。

この言葉に続けてさらに司馬遼太郎は次のように述べています。

社会のどういう階層のどういう家の子ども、ある一定の資格をとるために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師になりえた。

そして、明治という時代の雰囲気を「日本史上で例のない楽天的な時代であった」とも語っています。しかし、ほんとうに明治は「楽天的」な時代であったのか。

でしょうか。

維新後、多くの士族の娘たちが遊女として苦界に身を落としましたが、彼女たちにこの言葉を聞かせたらどんな言葉が返ってくるのでしょうか。また、赤貧生活を送っていた樋口一葉の家族が聞いたとしたら、どのような表情を見せたでしょう。おそらく彼女たちは「楽天的」という言葉に首肯することなく「生きていくのに精一杯だったよ」と言っつきそうなきがします。「楽天的」なのはあくまでも男性の社会にあつて通用する言葉であり、女性では条件が許されたほんの一握りの女性たちのみが「楽天的」に自らの未来を夢見ることができたのではない。生前、金銭の苦労ばかりしていた樋口一葉が死後に作家としての名声を得たとしても「楽天的」な明治人の中に入るのかどうか。

さて、前回、述べたように一八九三（明治二十六）年の春は樋口家の人々が最も貧窮にあえいだ年でした。あちこちに借金をしに回ったり、伊勢屋質店にたびたび小袖や羽織などの衣服を入れたりしました。この間の一葉の生活ぶりは雑誌「やたらつけ」にメモのように書きつけた次のような歌によって窺い知ることが出来ます。

六時より七時までこそ字はならへ
それよりは書をば十時まで読む

十一時十二時かけて文つくる

ひる過ぎしばし食休みなり
針仕事洗ひ物あらばやむをえず

夕方までは著作とをしれ
夕方遊び 夜は思慮なり思案なり
おのが心を寝る時にして

分かりにくい部分もありますが、忙しく一日一日を過ごしていたことが分かります。夜、一葉をとらえた「思慮」「思案」。彼女は何を思い巡らしていたのでしょうか。たぶん宵つ張りであつた彼女のこと。あれやこれやと世の更けるまで考えていたことでしょう。

この時期の作品は「暁月夜」と「雪の日」です。「雪の日」を「文学界」三号に発表したのは三月三十一日のこと。それから次の作品である「琴の音」を「文学界」十二号に発表したのは十二月三十日のことでした。この間、九ヶ月。一葉は書くことを放棄しています。彼女は実業つまり「商い」へと大きく方向転換をしていたのです。それを述べる前に一葉が大きく活動の場を広げる上で大きな意味を持った「文学界」との関わりを述べておきます。

「文学界」を企画し世に出そうとしたときの中心人物は星野天知（1862～1950）と平田秃木（1873～1943）ですが、まず平田秃木が「都の花」に載った「うもれ木」に感動して、その作者樋口一葉を「異彩あり」と手紙に書いて星野天知に伝え、

（文学の世界）の友人たちであつたのです。

木の第一印象を、一ものがたり少しするに言葉かず多からず、うちしめりて心深げなれど、さりとて人柄の愛嬌あり、懐かしき様したり」と記しています。初対面でしたが一葉は禿木に好感を持ったようです。

ちや鴨長明や吉田兼好らの中世隠者文学への共感と西洋文学への憧れを核とした浪漫主義を基調としていて、明治の浪漫主義の一つの拠点となりました。

同人には平田禿木・馬場孤蝶・戸川秋骨・島崎藤村・上田敏・松岡国男（後の柳田国男）らがいます。また、一葉は「客員」という形で入っていました。

初期の「文学界」の精神的なリーダーと言える人物は北村透谷（1868~1894）です。透谷はキリスト教の思想を背景にして「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（『文学界』明治26年2月）「内部生命論」（『文学界』明治26年5月）などのすぐれた評論を発表して、「想」の世界の「実」の世界に対する超越と文学の自律を説いて

「文学界」は星野天知を編集人として一八九三（明治二十六）年に創刊された文学雑誌で、一八九八（明治三十二）年一月に第五十八号が終刊として出されるまで発行が続けられました。日本古典、とくに芭蕉や西行といった漂泊の詩人たちや鴨長明や吉田兼好らの中世隠者文学への共感と西洋文学への憧れを核とした浪漫主義を基調としていて、明治の浪漫主義の一つの拠点となりました。

初期の「文学界」の精神的なリーダー
 と言いうる人物は北村透谷（1868～1894）

です。透谷はキリスト教の思想を背景にして「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（『文学界』明治26年2月）「内部生命論」（『文学界』明治26年5月）などのすぐれた評論を発表して、「想」の世界の「実」の世界に対する超越と文学の自律を説いて

北村透谷との直接の接触はなかったようです。もちろん「文学界」に掲載された

また、話がよそにずれますが北村透谷が同時代の人々に大きな衝撃を与えたこととして見落とすことができないのは彼の「恋愛至上主義」です。「厭世詩家と女性」（『女学雑誌』明治25年2月）で彼は次のように主張しています。

透谷は江戸期の恋愛を肉欲を基調とする「色」として否定して、魂と魂の結びつき、つまり霊的関係としての「神聖な恋愛」を主張したのですが、このような主張がなされたとき、当然のことながら問題となるのは「神聖なる恋愛」における女性の役割です。透谷は「処女の純潔を論ず」（『女学雑誌』明治25年10月）で以下のように述べています。

これでわかるように透谷の恋愛至上主義は「神聖なる恋愛」の対象である女性を清らかな汚れなき存在と崇拜するものです。しかし、「高尚なる恋愛は、其の源を無染無汚の純潔に置くなり」と言っている意味は分かりやすく言えば、恋愛が

「高尚なる」もの、つまり、「神聖なる恋愛」となるか、それとも「肉愛」に堕してしまうかは、ひとえに女性の側の処女性にかかっているということです。

このことは明治以来、日本の近代文学に根強くあつた「神聖なる恋愛」という觀念の中にあつては恋愛の主体としての女性、身体をもった女性は不在だったということを示しています。さらにいえば家庭内にいる女性、すなわち制度内にいる女性たちは「純潔」という監獄の中に閉じ込められ、その一方で、そこから排除された女性たち——特に身を売る女性たちは性的存在としての役割のみを受け持たされることになります。そして、この「純潔」という規範が女性たちによって共有、内面化されることによって女性による女性の差別化がなされていきます。透谷がいう「処女の純潔」、女性の処女性の讃美は、女性に対する抑圧として機能していったのだ、とは多くの近代文学の研究者が主張していることです。

もう一言、先走ったことをいえば、一葉が戸主としての役割を樋口家でない同時に「ものを書く女」でもあるということからいくと、彼女は「制度化」された女性の枠からはみ出た存在であつたといえます。これから述べる菊坂町から吉原遊郭近くの下谷竜泉寺町に引っ越した後、一葉は多くの差別化された女性たち（つまり遊郭で身を売って働く女性たち）に出会います。そのことによって彼

女は男性によって形づけられた恋愛イデオロギーが女性たちを制度内の女すなわち家庭内の女と、制度外の女、すなわち性的奉仕をになう女とに分断・差別していることに気づくことになったのだといえます。

こういったことに気づいた一葉は、やがて「たけくらべ」「にぎりえ」「十三夜」「大つごもり」などで当時の女性という存在が背負っていたさまざまな「意味」とその矛盾、そして、それによって女性に加えられる抑圧とを描くことになっていきます。

三

さて、大急ぎで話を一八九三（明治二十六）春以降の一葉にもどします。

明治二十六年五月、北村透谷が「文学界」五月号に人間には「内面」というものがあり、それを表現するのが文学の役割だとした「内部生命論」を発表したころ、本郷菊坂町の樋口家の家計はいよいよ窮地に陥っていました。この時期からの樋口家の困窮ぶりを一葉の日記から見てみます。

五月二日

此の月も伊勢屋がもとに走らねば事足らず。小袖四つ、羽織二つ、風呂敷に包みて母君と我と持ち行かん
とす。

「長持ちに春隠れ行くころもがへ」
とかや、誰やらが句を聞きし事あり。
その風流には似ざるもをかし。

「蔵のうちに春隠れ行くころもがへ」
（「長持ち……」の句は実は井原西鶴の句で「蔵のうち……」の句は一葉の自作。このとき伊勢屋で借りられた金は約三円と考えられる。）

五月三日

今日母君、伊勢屋がもとに又参り給ふ。（昨日、伊勢屋から借りた金では足りなかったのである）

五月四日

夕かけて、西村君がもとに金かへしに行く。帰りにお鉢どの居られたり。「これより西村に金借りに行かん」となり。

（「西村君」とは西村釧之助のこと。たきが乳母を務めていた旗本稲葉家の元家侍。文房具店礫川堂を小石川で営んでいた。お鉢は稲葉家のお姫様で一葉とは乳姉妹にあたる。この時、一葉は西村釧之助に返した金は一円であつた。この日の前後に一葉は浴衣を二枚お鉢に譲っている。おそらく質草にもならないほどくたびれていた浴衣であつたろう）

五月廿一日

西村君より一円借りる。

五月廿五日

邦子、今日より手内職をやめになす。

五月廿九日

金子借りに伊東夏子君を訪ふ。ここ

ろよく八円貸されたり。
六月廿七日

金策におもむく。

（父則義の幼なじみで共に旗本菊池家に仕えていた上野兵藏を頼る。一葉は日記ではよく「上野伯父」と書いている）

六月廿九日

上野伯父上来たる。我はただちに一昨日たのみたる金の成否いかかを聞きにゆく。出来がたし……………。

（このあと一葉はあちこちに金策に出かけるが）伊東君より帰りは日没後なりし。

生活費を何とかひねり出すために頭を痛め、あちこちに出かけていく一葉の姿が目につかぶようです。もちろん、この間に星野天知や平田禿木からは「文学界」に原稿を出してほしいという催促が何度も来ていました。

これと同時に「うもれ木」を発表した「都の花」を発行していた金港堂からも注文が来ていました。和歌の入った小説を書いてほしいというものでした。歌を詠む人々の優雅な世界を書いてほしいというのは萩の舎の主要メンバーであつた一葉にふさわしい注文でした。しかし、その優雅な世界に集う女性たちをよく見知っているだけに書くのは難題でした。一葉が萩の舎で出会った高貴な人たちは表こそ優美に振る舞い華麗な世界を形づくっていましたが、その裏では嫉妬と憎

悪の渦巻く世界であり、噂話によつて他人をけなし失脚させることに暗い喜びを感じる人々の世界でした。一葉自身もそうしたワナにはまり、桃水のもとを去ることとなつたのは以前書いたとおりです。また、師の中島歌子からは何度も弟子たちの愚痴を一葉は聞かされ、弟子たちは弟子たちで師の陰口をたたくのを一葉は何度も見聞きました。こんな場所、世界を材料にして自分が書くこうと思つてゐる「真の美」を書くことはできない。真の姿を描けば人間の悪い部分を世にさらすことになり、萩の舎の仲間の偽善ぶりを暴くことになります。「それはどうも」と思えば一葉の筆はどうしても鈍ります。もともと遅筆の一葉ですが、こうした事情もあつて一向に原稿は仕上がりにません。

ちつとも完成せぬ原稿。しかも金策に追われる日々。そうしたことは筆によつて生計を立てることなどはとてもできません。そこで一葉はついに一大決心をします。「よし、実業について商売を始めよう」と。万策尽きたかに見えた六月二十九日の夜のことでした。

四

六月廿九日の日記で「伊東君より帰つたるは日没後なりし」の記述の後に次のように一葉は書いています。

此の夜一同熱議。事業につかん事に決す。かねてより思わざりし事にもあらず。いはば思ふところなれども、母君などのただ嘆きに嘆きて、「汝（おまえ）が志しよわく、立てたる心なきから、かく成りゆきぬる事」とせめ給ふ。

「おまえの志が弱いからこうなつたのだ」と責め立てる母親ですが、しかし、一葉が十六歳で戸主となつてすでに五年。彼女は母親に対しても樋口家の決定権を譲ることはないほどに成長していました。右の日記の続きには次のようになっています。

家財を売たりとて、実業につきたりとて、これによりて我が心の移ろひぬるものならねど、老いたる人などは、ただものの表のみを見て……よしあしを定め給へり。

家財を売ろうが商売をしようが、文学への自分の志が変わることはない、と自分のしつかりとした思いを書き、年寄りは物事の表面しか見ない、と冷ややかに嘆き悲しむ母親を見つめています。周囲の出来事を客観的に見つめる小説家なまなざしが一葉には間違いなく育つていたのです。

六月二十九日の日記に続いて、新しく七月一日からつけ始められた日記の冒頭

に就業の決意を述べた有名な記述があります。

人つねの産なければ常の心なし。手をふところにして月花にあくがれぬとも塩酢なくして天寿を終わらるべきものならず。かつや文学は糊口の為になすべき物ならず。思ひの馳するままにこそ筆は取らぬ。いでやこれより糊口の文学の道をかへて浮き世を十露盤（そろばん）の玉の汗に商ひといふ事はじめばや……母子草の母と子と三人の口をぬらせば事なし。ひまあらば月も見ん、花も見ん、興来たらば歌もよまん、文もつくらむ、小説もあらはさん。

内容ははっきりしています。文学と生計を完全に分離して、家族三人が生活していけるようにして、余暇で文学活動する、というのがです。勇気凛々というところですが、悲壮感はありません。「十露盤の玉の汗」に掛詞が使っている辺りには精神的な余裕すら感じられます。

この記述の後で「読者の好みにしたがひて」小説を書くことは「うるささはこれにとどめをさすべし」と「本当にやりきれないことだ」と言いきつて、自分の願いは「せめて文字の上だけでも義務少なき身とならばや」、つまり、せめて文学においてくらいは外的な義務から自由な身でありたい、と書いています。

こうした記述から見れば、一葉の実業への決意は彼女にとっては生計を確たるものにすると同時に自分の過去の、たとえそれが一部だったにしろ、清算だったと思えます。食べるために作家になつた、つまり、糊口の文学を目指した自分を否定したとき、それでも自分は小説を書くとうとするのか、自分にとって小説を書くという意味は何なのか。そして、何をいったい書こうというのか。しばらくは「浮き世を十露盤の玉の汗」に日々を過ごしながら、一葉は「ものを書く女」としてのアイデンティティをしかと見定めようとしたのではないか。筆者にはそう思えます。

五

「商人になる」という戸主一葉の決意のもと三人の議が決すれば樋口家の人たちの動きはすばやいものがありました。まず、転居の費用と出店をはじめる元手です。

「一同熱議」の明後日の七月一日、母のたきが父則義の知人から十五円を受け取り、一葉はたきの弟で山梨県在住の芦沢卯助に五十円の出費を手紙で頼みました。しかし、これはのちに断られています。また、四日には父則義の東京府庁時代の上司である小林好愛に五十円を借りようとしたが、これも断られました。こうなれば最後の手段と最後までとつて

おいた絹の着物も含め、着物類を売り払うことにしました。萩の舎のような偽善に満ちた華やかな世界に出向くこともあるまい、「万憂を捨てて市井の塵にまじらはむと思ひ立ちたらむ身に、花紅葉なんのうるはしき衣(きぬ)か着るべき」と覚悟を決めたのです。

二重緞子の丸帯一本、緋博多の片かわ帯、縮緬の衿の着物二枚など計十五円で売りました。その金をもって伊勢屋に行き、質入れしてあつた質草の着物を受け出し、それも売り払いました。要するに必要最小限の着物以外は全部売ってしまったのです。一葉の覚悟や見るべし、です。

十一日は父則義の祥月命日でしたので、兄の虎之助もやってきました。母親のたきとの間柄がよくない虎之助に一葉が出店の話をする。「商売というのは見かけほど楽ではない。今まで士族風を吹かしてきた女三人に何ができるのか。三人の心が折れるようなときは助けてやるが、それまではご随意に」といたって冷ややかな返事。こうしたこともあり、ふたたび母親のたきは次のような言葉をなぐりとも一葉に浴びせかけます。

あなわびし。今五年先に失せなば、父君おはしますほどに失せなば、かかる憂き世も見ざらましものを。我一人残り留まりたるこそかへすがへす口惜しけれ。子は我がことばを

用ひず、世の人はただ我をぞ笑ひ指すめる。邦も夏もおだやかにすなほに、我がやらむといふところ、虎之助がやらむといふところにだに従はば、何条こと(何ということ)の意かはあらん。いかに心を尽くしたりとて、身を尽くしたりとて、甲斐なき女子の何事をかなし得らるべき。あな、いや。あな、いや。かかる世をみるもいやなり。

母親からいくら嫌味を言われても借金までして、その上、余分な着物もすべて売り払ってしまったとあつては戸主一葉に引き返す道はもはやありません。自分の身が波にもたせられる小舟のよう、まさしく「一葉」というペンネームにふさわしいと思えたとしても今は前に進むしかありません。

そして、次なる課題は店を構える場所探しでした。これが大変でした。

十五日に一葉は妹邦子と共に丸一日かけて店舗の候補を探し歩きました。午前には神田、浅草を歩き回って現在の秋葉原駅と浅草橋の間の小路に四畳半と二畳の二間の空き家を見つけます。店のために三畳ばかりの板の間もあつて、そこには畳もあつて建具もついている。敷金三円で月家賃一円八十銭とのこと。これぞ、と思い、庭がないのが気になるがいったん帰宅して母親のたきに相談することとしました。

母親のたきに相談すると「下町はいやだ、庭のないのもダメだ」と言い張ります。たきの思いとしては則義と江戸へ駆け落ちして来たばかりの頃を除いて、そこまで貧しかったことはなかったし、自分たちの努力で手に入れた士族としてのプライドを捨てることはできなかったのです。士族ともあろう者が下町の、それも庭もないような家に住めるもんですか、というわけです。

やむなく一葉と邦子は、その午後、下町はダメだと言ひ張るたきの言葉を受け入れて山の手を歩き回ります。駒込、巣鴨、小石川、牛込と歩き、さらには飯田橋からお茶の水通りあたりをとぼとぼと歩き回りますが、これといった物件はありません。たぶん二十キロメートル以上は歩いたでしょう。このため、翌日は疲れ切つて二人とも動けませんでした。

十七日にはたきと一葉の二人が下谷方面で探しますが、見つかりません。浅草方面に向かい新吉原の西にあたる下谷竜泉寺でこれはという家をやつと見つけます。

間口は二間、奥行きは六間ほど、座敷が五畳と三畳でそれぞれ南向きと北向き、なんといつても小さいとはいえずに庭がありました。敷金三円、月家賃一円五十銭。たきも妹も異議なし、ということ、ここに決めることにしました。十九日、一葉は伊東夏子、中島歌子を訪ねています。商売を始め、誰とも遠く

なるので、という挨拶でした。暇乞い(いとまぎ)に近かったといえます。これで十四歳から通い続けた萩の舎から離れることとなりました。そうした用事の済んだあと樋口家の女性たちは引越しのための家の片づけをしています。この作業には近所に住んでいた姉ふじの夫も手伝いに来てくれました。その日の日記の末尾に一葉はこう記しています。

今宵は何か胸騒ぎて眠りがたし。さるは、新生涯をむかへて旧生涯を捨てんことの横たわりてなり。

転居前日の一葉は竜泉寺町での新しい生活への不安と期待で胸は一杯でした。

隠された歴史(82)

満田 正賢

前回私は、『枚方歴史フォーラム検証―古代日本と百済』(大巧社、2003年)が、「馬韓土器と百済土器の出土状況によって、従来百済との交流と日本書紀に記された史実が、長期間において百済とは別の馬韓(采山江流域)の勢力との交流で

あったのではないか」という問題提起をしていることを取り上げました。

代表的な渡来系氏族である東漢（あずまのあや）氏の始祖・阿知使主（あちのおみ）、西漢（かわちのあや）氏の始祖・王仁（わに）、秦氏の始祖・弓月君（ゆづきのきみ）は、いずれも応神期に百済から来たと日本書紀に記されていますが、彼らが渡来した時期と土器の出土状況からみて、彼らは百済からではなく馬韓地域から来た氏族であると考えるのが妥当であると思われます。

しかし、そうすると日本書紀に引用された百済三書の信憑性を見直す必要があります。そこで今回と次回に渡って、百済三書の信憑性についての考察を試みました。百済三書とは神功紀、応神紀、雄略紀に引用された「百済記」、雄略紀、武烈紀に引用された「百済新撰」、継体紀、欽明紀に引用された「百済本記」の三書を言います。今回は、年代的に新しい「百済本記」と「百済新撰」を取り上げました。

＊日本書紀の引用箇所は『原本現代訳日本書紀』山田宗睦訳文を用いました。

まず、日本書紀中の百済本記の引用箇所を列記します。百済本記は馬韓（采山江流域）地域が六世紀初葉、いわゆる任那四県割譲によって、百済に吸収された時期以降の倭と百済との関係を描いています。

①継体三年…百済本記はいう、久羅麻致支彌（くらまぢきみ）が日本から来た。未詳である。

②継体七年…百済が姐彌文貴（きみもんき）將軍、洲利即爾（つりそに）將軍を遣わし、穗積臣押山（百済本記はいう、委（わ）の意斯移麻岐彌（おしやまきみ））に副えて、五経博士の段楊爾（だんように）を貢上した。

③継体九年…物部連（名を欠く。）を副えて遣わした。（百済本記はいう、物部至（ちち）連。）

④継体二十五年…天皇は病が重かった。七日天皇は磐余玉穗宮で崩じた。ときに年は八十二。冬十二月五日、藍野陵に葬った。（或本はいう。天皇二八年星が甲寅に宿る年に崩じた、と。しかるにここで二五年星が辛亥に宿る年に崩じた、といったのは、百済本記を取って文としたのである。その文はいう。

太歳辛亥の三月に軍が進んで安羅に至り、乞毛城（こつとくのさし）を営った。この月、高麗、その王安を殺した。また聞く、日本の天皇および太子、皇子、ともに崩すと。これによって言え、辛亥の年は、まさに二五年に当たる。後に諸本をつきあわせて調べるものが、正しく見分けるだろう。

⑤欽明二年…別に安羅の日本府の河内直が、新羅と計を通したことを、はげしく責めののしった。（百済本記はいう、

加不至費直（かふちのあたひ）・阿賢移那斯（あけえなし）・佐魯麻都（さろまつ）ら。未詳。）

⑥欽明五年…また津守連が日本から来て（百済本記はいう、津守連己麻奴跪（こまなこ）、しかるに語がなまって正しくない。未詳。）

河内直（百済本記はいう、河内直、移那斯、麻都。しかるに語がなまって、その正しい形は未詳。）

汝の先祖らは（百済本記はいう。汝の先祖那干陀甲背（なかんたこうはい）、加獵直岐（かろうじき）甲背、またはいう。那奇陀（ながだ）甲背、鷹奇岐彌（ようがきみ）。語がなまって未詳。）

為哥可（いかか）君（百済本記はいう、為哥岐彌（いかきみ）、名は有非岐（うひき）。）

そこで使を遣わして日本府（百済本記はいう、烏胡跛（うごは）臣を遣わして召す、と。たぶんの（いくは）臣である。）

安羅人は日本府を天として、その意向にだけ従います。（百済本記はいう、安羅を父とし、日本府を本とする。）印支彌（いきみ）の後に来た、許勢臣の時で、（百済本記はいう、わが印支彌を留めた後に、やってきた既洒（こせ）臣の時、と。みな未詳。）

百済の使人奈率得文（なそちとくもん）、奈率奇麻（がま）らが、日本よりもどつていうには、（百済本記はいう、冬十月、奈率得文、奈率奇麻らが日本よりもどつていうには、天皇に奏したところの河内直、移那斯、麻都らの事は報える勅がなかった。）

継体紀、欽明紀の中にある百済本記の引用箇所、十二か所のうち六か所に「未詳」という言葉が使われています。これは、継体紀、欽明紀の編者の手元に百済本記があるが、百済本記に記された内容（人物）のことははっきりしない、つまりからではないというという意味です。このような表現を加えていることによって、逆に百済本記の原文に手を加えずに引用していることが推定できます。

しかし、百済本記には、「天皇」や「日本」という言葉が使用されています。「天皇」や「日本」という言葉は一般的には天武朝のころから使われ始めたと言われています。少なくとも継体・欽明の頃には使われていない言葉です。この言葉の置き換えについては、継体紀や欽明紀の編者がおこなった可能性もありますが、百済三書は日本書紀編纂直前に百済王室の亡命者たちが編纂したという説が有力ですので、百済本記の編者が当時の用語を使用して百済本記を編集した可能性もあると思われます。

継体二十五年条では、百済本記の記述によって継体の没年を決めたとしています。しかし、安閑紀以降の年次の記述は「或本」の年次に従っています。三品彰英氏は、この時点での百済本記の年次が三年ずれていたと考察しました。『継体紀の諸問題―特に近江毛野臣の所伝を中心に』『日本書紀研究・第三冊』所収）

三品氏の考察の概要は、「百済本記は百済の聖明王の死から王子余昌（威徳王）の即位までの空位の三年間をなきものとして編纂されている為、聖明王の治世が三年増やされている。その為実際の出来事が三年繰り上がって記されている。ちなみに、新羅本記では、金吾国（南加羅）滅亡は法興王十九年（五三二）であるが、継体紀ではこの事件が継体二十三年（五二九）に記載され、これまた同じく三年繰り上げられている。」というものです。すなわち、継体紀の編者は信頼できる国内史書をもっておらず、百済本記の記述を最も信頼していた事がわかります。

「隠された歴史（81）」によれば、継体紀に記された百済への任那四県の割譲によって、采山江流域の馬韓勢力が初めて百済の支配下に入り、継体王朝（それを引き継いだ後期九州王朝）と百済との蜜月がはじまったことになります。これは日本書紀を編纂した近畿王朝には完全には残っていない歴史です。従って朝鮮半島の出来事の記述には百済本記の記述に大きく頼る必要があったのではないのでしょうか。

また、百済本記に残された移那斯・麻都の話やその先祖の話は、創作ではなく、百済側からみた史実を記載したものとして理解する必要があると思われる。

次に百済新撰を取り上げます。百済新撰は、五世紀末葉から六世紀初葉、すな

わち、馬韓（采山江流域）地域に九州様式の前方後円墳が作られた時期の、少し前の時代からの倭と百済との関係を描いています。

日本書紀中の百済新撰の引用箇所を列記します。

①雄略二年…百済新撰はいう、己巳の年に、蓋鹵（こうろ）王が立った。天皇は阿禮奴跪（あれなこ）を派遣して、百済に来て、女郎（えはしと）をもとめた。百済は慕尼夫人（むにはしかし）の女を着飾らせ、適稽女郎（ちやくけい）といはしとといった。天皇に貢進した。

②雄略五年…百済新撰はいう、辛丑の年に、蓋鹵王は、弟の昆支（こにしき）君を遣わして、大倭に向かい、天王に侍した。もって兄王の好を修めたのである。

③武烈四年…この年、百済の末多王が、道に反し、百姓に暴虐であった。国人はともに除いて、嶋王を立てた、これが武寧王である。百済新撰はいう、末多王は道に反し、百姓に暴虐であった。国人はともに除いた。武寧王が立った、諱は斯麻王、これは琨支王子の子で、末多王の異母兄である。琨支は、倭に向かった。ときに、筑紫の島に至り、斯麻王を生んだ。島より本国にもどし送ったが、京に至らぬうち、島で産んだ。それで斯麻王と名づけた。今各羅の海中に主島がある。王の産まれた島

で、だから百済人は名づけて主島とした。今案するに、島王は蓋鹵王の子である、末多王は琨支王の子である。これを異母兄というのは、未詳である。

蓋鹵王の即位は四五五年（乙未）であり、雄略二年条に記された己巳年（四二九年又は四八九年）とは一致しません。古田史学会員の大原重雄氏は「雄略二年条に記された己巳年の記事は作文ではなく、己巳年（四二九）の百済・毗有王の記事を蓋鹵王に名前を変えて雄略期に挿入した」と考察しています。この考察は正鵠を得ていると思います。己巳年（四二九）の記事も辛丑年（四六一）の記事も倭国と百済との交流を記した記事ですが、日本書紀はそれを雄略（近畿王朝）との交流記事として描いたため、己巳年（四二九）の記事は、毗有王の時代の出来事であるにも拘わらず蓋鹵王の時代の出来事として掲載されたとみるのが合理的な解釈であると考えます。

雄略二年条に記された百済・毗有王と倭国との交流時期が雄略（近畿王朝）との交流記事ではないとすると、同じ百済新撰に記された蓋鹵王時代の倭国との交流記事、昆支が倭国に来て武寧王（斯麻王）が筑紫で生まれたという記事に出てくる倭国も同様に近畿王朝ではないということになります。

毗有王時代の倭国との交流記事、蓋鹵王時代の倭国との交流記事、昆支が倭国

に来て武寧王（斯麻王）が筑紫で生まれたという記事はいずれも造作ではなく史実であり、前期九州王朝との交流であったことが考えられます。

高麗時代（十二世紀）に編纂された三国史記百済本紀には、蓋鹵王、文周王、昆支、東城王（末多王）、武寧王（斯麻王）、聖王（聖明王）の条に倭国が全く登場しません。ということは、蓋鹵王時代に百済と九州王朝（前期九州王朝）との交流を記した史書があったが、三国史記百済本紀には採用されなかった、又は葬られていた、ということになります。すなわち、百済新撰という史書は存在するが、前期九州王朝との交流を近畿王朝（雄略）との交流にすり替えた為に、雄略紀の編者が年次を操作した可能性が高いということです。

今回は、四〇五世紀の百済を記した史書である「百済記」の記事に取り組みます。この「百済記」に初めて『枚方歴史フォーラム検証―古代日本と百済』が描いた馬韓（采山江流域）地域が現れます。

俳句

影山 武司

蹲の水にさざ波宵涼し
初恋の色の器にかき氷
路地奥に風を呼び込む氷旗
合歡の花あのねあのねのリフレイン
水底の砂のきらめき泉川
ブロンズの裸婦の乳房の灼けてをり
弟は兄のが欲しき浮いてこい
天守台の白の眩しく花蘇鉄
離島へと出航のベル南吹く
遠雷や胸曝け出し撮るエコー

編集後記

S K 生

▲今年は広島、長崎に原爆が投下されて80年の年である。最近のニュースではアメリカの若い世代では「原爆投下に賛成」を支持する人数が減っているという。核兵器が人間のすべてを根こそぎ奪う恐ろしいものだという認識がかの国でも広

まっているのを心から歓迎したい。しかし、被爆国の日本で今回の参議院選挙で「核兵器が最も安上がり」と公言してはばからない参政党の立候補者が国会で議席を得た。この言葉を被爆一世の人たち、長年にわたって核兵器廃絶の運動に携わってきた人たちはどのような思いで聞いたか。胸が痛む。▲「核兵器は安上がり」だけではなく、参政党は「日本人ファースト」をキャッチコピーにして多くの支持者を集めた。支持者の多くは物価高で生活苦にあえぐ人々であり身近に増え続ける外国人の姿に不安を覚える人々である。彼らは自分と家族の生活の安定をひたすら望む人々であり、いま自分の目の前にある問題を何とかしてほしいと強く願う人々である。選挙の結果から見れば、彼らの望みや願いを老舗の政党はすくいきれなかったのだ。▲自分たちの不満と不安を真実に基づいて解決の方向を示してくれる言葉よりも解決してくれそうな存在を「ワラをもつかむ」思いで信じたということだろうか。こうした少なくともない国民の姿を既成政党や「オールドメディア」は自らの中に十分に取り込んでいく努力がこれからはいるであろう。政治を動かす人々や言論を掌る人々がそうしたことを怠るならば、この国の民主主義はおそらく危うい。▲アメリカの俗語に「お前は口ばっか (Only Mouth!)」というのがある。参政党が選挙中に公約としていた「子供一人あたり十万円支給」



木槿の花



桔梗の花



ギボウシの花

五七五を読む

— 十七音の響き方①

初日の出生きとし生ける物すべて 浜子

万物をあまねく照らす日のひかり。新しい年が明けた。そして、地の隅々あまねく水は行き渡る。地球をつくり、命を支える太陽と水。

万物の春待ち侘びる息つかい 恵子

命無きものと命に春間近。

向い風八十路の母が前に立つ みつ子

人のため生きて自分を生きる母。

人生を繙くほどにわく句想 幸一郎

生きて来た心かたちにする一句。

好きだから許してしまうあっかんべー

正彦

物思いの中ならやさしいワタシ。

春風にふかれた様な仮名の文字 ふみお

春風に句帳の文字も踊り出す。

誕生日来るたび忘れ行く記憶 修一

我が母は、死ぬことも忘れて母は

百寿越え。

已にならい脱皮を重ね一歩ずつ いぶき

年明けた脱皮するには良い機会 洋治

そうだ、ザリガニもバツタも人も

脱皮する。

決断に迷って仰ぐ寒の月 羊子

難問が解けて見上げる春北斗。

飛び乗った電車が逆に動き出す 和俊

安道湖北岸に行く一畑電車は、一畑薬師の駅に入り、スイッチバックして出て行く。それを知らなかった

私は、背中にあったはずの湖が目の前に見えてうろたえたことがある。

凡人に海と空が大きすぎ 幹夫

人間には手に負えないものがある、と知るのは大事だと思う。今の世で

人の手に負えないものを散文的に言えば、金（資本）、原子力（核エネルギー）、そして情報だろうか。

時を経て再会の場合は丸くなる 敦

その後積み上げた時の中で、人は自分を磨き、何かを受け入れる器量を大きくする。

活かし合う十人十色出す個性 菊江

無骨だがコピーとならぬ一人芸 智晴

「みんな違ってみんないい」（金子みすゞ）。その上で、他と比べない私の色をどう出すか。

癖のない味が嬉しい塩むすび 笑美

塩むすびに限らない、真つ当で普通であることを越えるものはない

のではないのでしょうか。

新婚の孫には甘い唐辛子 江美子

どんな艱難辛苦も、二人なら越えられる。

仏壇に上げる花なくご飯置く 昭三郎

人は逝き遠くて近い人になる。一番近い自分の中にいるから、花を上げご飯を置く。合掌。

心持次第で丸く生きられる 春子

「考えを直せばふつと出る笑い」。松山で活躍した番傘同人・前田伍健の代表句です。

故里の山の初日に手を合す 忠

ふるさとの山に向かいていうことなし、と啄木。ふるさとの山はどうしてこれほど懐かしいのか。私も、ふるさとの山はとことん泣けと言う、と思ったことがあります。

野暮なんてもまれもまれるうちに粹

みちる

不真面目でいい加減だという真面目、もあるけれど。粹になるまで一貫する野暮もいい。

ザクザクと落葉も鳴った里の冬 百子

踏みしめた落葉の鳴る音も今では

遠い記憶。

老いるほど人間力が試される 幸子

昔むかし。「生きるってことは、自分の中の、死んで行くものを、くいとめるってこったよ。気を許しゃあ、すぐ魂も死んで行く。筋肉もほろんで行く。脳髓もおとろえる。何かを感じる力、人の不幸に涙を流す、なんてエ能力もおとろえちまう。それを、あの手この手をつかって、くいとめることよ。それが生きるってことよ」と、山崎努演じる父が昔別れた高校生の息子（鶴見辰吾）に語るドラマがあった（山田太一脚本『青春スケッチブック』）。
考えてみれば怖いことです。